(四) 自然に覚え自然に使えるように

言葉や文字の学習は、知識の段階に止まっていたのでは“ほんもの”ではありません。わたしどもの英語のように、日本語で考えたことを、英語に直して話すようでは“ほんもの”ではないのです。ひとりでに口をついて出てくるようでなければなりません。

ですから、“テストすれば書けるが、作文には使えない”ようでは、ほんとうの漢字力とは言えないわけです。使おうと思って使うのではなく、“ひとりでに使う”のでなければなりません。

そのためにはまず、“最初はかなで、漢字はあとで”というやり方は絶対にやめなくてはなりません。

つぎに、“ひとりでに覚えられる”幼児期に学ばせることが是非必要です。学ぼうとして学んだものは、よほど反復練習しても、使おうと意識して使わなければ使えませんが、ひとりでに覚えたものは、よく身についていて、ひとりでに使えるものだからです。

わたしたちは、日本語を使う場合、文法など全く考えないで使いますが、それでいてちゃんと文法に適っています。もっとも、はじめに文法があって、それに合わせて日本語ができたのではありませんから、これはあたりまえのことですが、とにかくこのような能力は、①生まれた時から、いつも日本語に接していて、②それがひとりでに身についてしまい、③いつもそれを使っているから自分のものとなったのです。

漢字も、こうした日本語の学習方法で学習すれば、ひとりでに身につきます。ところが、①学校でその漢字が初めて出てきた時だけ練習し、②先生から覚えろと言われて、テストに間に合う程度だけやり、③テストが終わればもうほとんど使わない……これでは漢字能力のつきようがありません。

「宇宙」というのは、中学生になって初めて学習する字です。ところが、この文字は、テレビにはたびたび放送されるし、また新聞にも大きな活字になって出ます。ですから、幼児でもいつかひとりでに覚えてしまっています。

ある幼稚園で調べてもらったところ、かなりの子が読めるということでした。小学生など調べるまでもないでしょう。特に学校で教えなくても、このように、見聞きしていれば、いつともなく覚えてしまうものです。

だから、家庭や学校で、もっと計画的に、漢字が子どもの目に触れるように配慮するならば、特に学習させなくても、子どもたちは、きわめて容易に漢字を覚えるはずです。